

とと屋禅譚

岡本かの子

青空文庫

明治も改元して左程さほどしばらく経たぬ頃、魚河岸うわがしに白魚と鮎あゆを専門に商う小笹屋という店があつた。店と言つても家構えがあるわけではなく鮪まぐろや鮫さめを売る問屋の端の板羽目の前を借りて庇ひさしを差出し、其その下にほんの取引きに必要なだけの見本を並べるのであつた。それだからと言つて商いが少ないと言ふわけではない。

なにしろ東京中の一流の料理屋が使う白魚と鮎あゆに関する限りは、大体この店の品が求められるので、類の少ない独占事業でなにかにつけて利潤は多かつた。第一、荷嵩にかさの割合に金目が揚がり、商品も小綺麗な代物なので、河岸の中でも羨うらやまれる魚問屋の一軒だつた。

あるじの国太郎は三五六のお坊つちやん上り、盲目めくらじま縞はんでんの半纏はんてんの上へ短い筒袖つつそでの被布ひふを着て、帳場に片肘かけながら銀煙管ぎんぎせるで煙草を喫すつてゐる。その上体を支えて洗ひ浄められた溝板どぶいたの上に踏み立つてゐる下肢は薩摩さつまがすりの股引ももひきに、この頃はまだ珍しい長靴はを穿はいてゐるのが、われながら珍しくて嬉しい。その後に柳橋の幫間ほうかん、夢のや魯八が派手な着物に尻端しりはしよ折りで立つて居る。魯八は作り欠伸あくびの声を頻しきりにしたあとで国太

郎の肩をつつく。

——ねえ、若旦那、もう、お客が来ねえじゃありませんか。さあ、この辺で切り上げましょうよ」

——おまえみたいな素人しろうとにお客が来るか来ねえか判るもんか。見ろ、まだ九時過ぎだ。あと一稼ぎしなきゃあ、今日のおまんまに有り付けねえ」

国太郎はそう言ったが、自分の冗談が幫間の気持ちの上にどんなに響くかちよつと顔の後へ向けて魯八の顔を見る。ちゃんと知つてて魯八は如何にも大きな声を張り上げる。

——今日のおまんまに有り付けねえとはよく言ったね。お大名はエテ、そういうせりふを吐いて見たいものさ。だが、お大名と言やあ、あつしあ今朝から見て居て呆あきれたよ。こちらの御商売は全くお大名だよ。来る客も、来る客も、まるで乞食さ。無代ただでも貰つて行くような調子で、若旦那済まねえがこれを少し分けておくんなさいと言うと、やるから持つてけ——だが負からねえぞ。——これじゃあ、どっちが売手だか買手だか判りませんぜ」

国太郎は河岸のふうであると共に、歿なくなつた父親の態度を見よう見真似で子供の時からやつて居る自分の商い振りが、どんなに大ふうなものか全然意識しないではなかつたが、

いま他人の感じに写った印象が、どのくらい権高なものかを知ると、幸福のような痛快のような気がして少し興奮して言った。

——そりや、幫間の商売とはちつとばかり違うさ」

これを聞いて魯八は、輕蔑に對する逆襲に向つて来るかと思いのほか

——全くさ、幫間と来たら、こりや論外でさ」

と、超然とする。国太郎は張合い抜けがして魯八のしよげた姿を見ると、それと對照して、今度は自分の大ふうな態度の習慣が何だか過失でもあるかのように省みられ、白つちやけた気持ちになつた。なるたけ早くしよげた男をいたわつてやらなくちやならない氣に急^せき立てられ咄^{とつさ}嗟の考^せえで言つた。

——おまえ、一足さきに吉原へ行つて、いつもの連中を集めて置け。おれは直ぐ後から行くから、田舎の客人も二三人招ぶのがあるから」

虎の門琴平さまの朝詣りの歸りに寄つたという魯八は、国太郎の命令でそそくさとみやげのお札もそこへ忘れ、急いで店先から出て行つた。

陽が射して来て、少し色の濁った皮膚が乾いて来た小鮎の並べてある笹籠を前に置いて、国太郎はまだ客を待つていた。実のところ今朝から客足が思わしく無く持荷の半分も捌ける見当がつかず、いたずらに納屋で飴色の腹に段々鼠色の斑が浮いて出る沢山の鮎の姿を思い出すとうんざりした。商売は其の日の運不運だから、それはまあよいとして、此頃頻りに手詰まって来た金の運転には暗い気持の中に嫌な脅えさえ感じられた。売先からの勘定は取れず、貸越し貸越しになり、それに引きかえ荷方からは頻りに勘定の前借りを申込みれる。小笹屋は河岸でも古い問屋であり、父親の抜目の無い財産の建て方から、四日市裏の自宅の近所に多少の土地と家作も持ち、金融力と信用はある方だったが、国太郎の代になってからの此の貸借逆調の狭み撃ちには、いつか持ちものを切り縮めて行って、差当り生活の為め必要な現金さえ此頃は妻が氣を利かして里方から色々の口実で少しずつ引出して来るものを黙って使い繋いでいる羽目になっていた。

世間は案外敏感で、小笹屋の暖簾も、と噂する陰口は河岸ばかりでなく、遊びつけの日本橋、柳橋あたりの遊里にまで響き、うっかりしたお雛妓の言葉使いにも隠されぬ冷淡さがあった。そこで、近頃はまだ噂の行き亘らぬ吉原方面に場所を変え、そこを取引先との

交際場にも、自分の憂さ晴らしにも使うようになった。そして不思議なことには斯ういう羽目になるにつれ、国太郎の大ふうは、ますます増長して、損得の算盤からは遠ざかつて行つた。

それは瘦我慢とも捨て鉢とも思えるものだった。しかし一番底の感情は、都会つ児の彼の臆病からだった。彼は斯ういう態度を取つて居なければ直ぐに滅入つた気持ちに誘ひ込まれた。

——こりや全く破滅の坂道だ」

根が愚鈍でない国太郎にはすべての筋道が判つていた。お坊っちゃんや旧家が——滅びる筋道はこれ以外には無かつた。そしてそれを免れる遣り方も彼には判つていた。それは簡単だった。時代並みの商人になればそれでよかつたのだ。貸越しをもう少し催促して取立て、前借りをもう少し引緊めて拒絶する。その代り売値の価を安くする。この手心一つにあつた。結局、河岸の伝統を捨てて普通の商人の態度になればよかつたのだ。英雄氣質を捨てて凡人に還ればよかつたのだ。

そしてこの事は、もう河岸でもそう恥かしい事ではない。軒並みに伝統の氣質と共に並用されて来て而もその態度を採用するものほど繁昌し、採用しないものほど店が寂れて行

く徴候いちじろの著しいのが目につく。そう判つていながら国太郎にはそれが出来なかつた。小笹屋の若旦那！この言葉一つに含む一切の虚栄心が折角、覚悟した何もかもを彼から吹き飛ばして、彼を芝居に出て来る非現実な江戸っ児氣質のお坊っちゃんのようにしてしまふのだつた。

——ねえ、若旦那、すまねえが」

斯う言われると彼は腹で齒噛みをしながらか「いけない」とは決して口へは出されなかつた。

感慨がしきりに催して来た国太郎がうつろに眺めている往来の泥濘に幾十百かの足は往來したが、彼の店には一つも入つて来なかつた。自分のところの店番の若者と小僧の足袋たび蹴足はだしの足が手持無沙汰に同じ処を右往左往する。眼を挙げて日本橋を見ると晴れた初夏の中空に浮いて悠揚と弓なりに架かかり、擬宝珠ぎぼうしゆと擬宝珠との欄干らんかんの上に忙しく往來する人馬の姿はどれ一つとして生活に自信を持ち、確とした目的に向つて勇ましく闘いつつある姿でないものは無い。「それに引きかえ自分一人は、没落の淵にぶくぶく沈みつつあるものだ」こう思えて仕方がなかつた。彼は舌打ちをして店の者に言つた。

——もう店をしまえ。おれはこれから客人つきあの交際つきあいに直ぐ吉原へ行くから。家へ帰つた

ら、おかみさんにもそう言つといて呉れ」

三

日本堤まで人力車で飛ばして、そこから国太郎はぶらぶら歩き出した。すべてが惰性と反撥で行動しているように思える自分について、もう少し考えたかった。青楼へ上つてしまえば自省も考慮ももうそれまでだった。昼の日本堤は用事のある行人で遊里近い往還とも思われなかった。藁^{わら}葺^{ぶき}屋根を越して廓^{くわく}の一劃の密集した屋根が近々と望まれた。日本建ての屋根瓦のごちやごちやした上に西洋風の塔が取つて付けたように抽^ぬき立っていた。すべてが埃^{ほこり}に塗^{まみ}れて汚らしく、肉慾で人を繋ぐグロテスクで残忍な獄屋の正体をありありと見せ付けられる感じがした。空だけが広く解放されていて、そこに鳶^{とんび}と雲がのびのびと泛^{うか}んでいた。国太郎がこの堤を歩くのは今が始めてではなかった。彼はどこの遊里へ入る前にも俾^{くろ}を下りてしばらく歩くのが癖だった。遊里へ入る前ほど彼の気持を厳肅にし反省^{くろ}するときはなかった。そしてそのときほど彼は彼の若き妻を想うときはなかった。

相当の地位の官吏の娘と生れ、英語塾で教育を受けた彼の妻の梅子は、当時に於てはモ

ダンにも超モダンの令嬢である筈だ。ところが歌舞伎芝居が好きで、わけて田之助びいきの処から、其の楽屋に出入りしているうち同じ鬘負ひしきの国太郎と知り合い、官吏の家庭とはまるで世界の違う下町生活の話を聴いて異常な好奇心と憧憬から自分から進んで黒縹くろしゆす子の襟えりのおかみさんになったのであった。全くの山の手のお嬢さん気質と、全くの下町の坊っちゃん気質と共通するところがあつて彼女は国太郎にナイーブなどころを見付けていた。国太郎はまたどうかしてこの教育ある令嬢出のおかみさんの尊敬を贏かち得るような夫になろうと苦心した。

努めて下町のおかみさんになろうとする梅子は少しの悪びれたところも見せず「交際なら」と国太郎を遊里に出してやるようにする。国太郎も、官吏のお嬢さんを貰つて側にばかりへばり付いて居るといふ非難を河岸の者から聴き度くない為め、精々交際は欠かさなようにする。そして、どこの里にも馴染なしみという女の一人や二人はある。だがそれが何だ。子供の時から父親に連れられて出入りした遊びちまたの巷ちまたに、今更パツシヨネートなものを見出すべくも無い。寧ろ梅子の側に居る時くらい歓びを感じる時は無い。それでいて梅子とは何一つしみじみした話をするとも無いのだ。ただ世間でお雛ひなさまのようと言われる美しい夫婦の顔を向き合つて菓子位つまむだけだ。ここにも小笹屋の若旦那の大ふうが付き

纏うのか。話をしたいのは山々だが、心からの言葉はつい自分の無教育をも暴露しような懸念があるので連れ添う妻に向つてさえ愛情が素直に口に出ないのだ。性情に被りついて仕舞つた何という伝統の厚い皮だ。

——ちよつと伺いますが、吉原では何という遊女屋が有名ですか」

ついうかうかと考え込みながら見返り柳の辺りまで来た時に、斯う後から訊く者があつた。国太郎が振返つて驚いた事にはそれは旅姿の若い僧であつた。

——幾軒もあります——まあ、K——楼などと言うのが一般に通つていますね」

国太郎はつい自分がこれから行こうとする青楼の名を言つてしまった。しかし若い僧は国太郎がじろじろ見上げ見下ろす眼ざしには一向無頓着むとんちやくになお進んで訊ねる。

——そこで遊ぶには最低、いくらかかりましょう」

国太郎は相手があまりに身分に不似合な問いを平気で訊ねるのに引込まれ、彼も極めて事務的に答える。

——左様、一円もあればいいでしょう」

——はあ、一円。こりや大金だわい。だが丁度持つとるて。ワハハハハ」

若い僧は朗らかに笑つて礼を言つて行きかけた。流石さすがに国太郎はそのまま僧を去らすわ

けには行かなかつた。袖を控える。

——遊ぶつて、あなたが遊びなさるのですか、その坊さんの服装ですると僧は少し心配そうな顔になり

——はあ、この服装では登楼さして呉れませんかな

——いや、そうじゃあ、ありませんが、だいぶ勇気がおありですな

僧はそれを聞いて安心したふうで頭に手をやり

——いや、まことに生臭坊主で

僧は流石に笠を冠つて大門の中へ入つて行つた。国太郎の心には不思議なものが残つた。

四

引手茶屋山口巴から使を出して招んだ得意客を待受け、酒宴をして居ると夕暮になつた。相変らず酒宴の座を一人持ち切りで掻き廻している魯八の芸も今は国太郎にはしつこく鼻についた。さつき見た雲水僧の言葉態度が妙に心に引つかかっていた。やがて提ちようちん灯とうに送られて、国太郎の連中はK——楼へ入つた。K——楼に入ると直ぐに楼の女から雲水

僧の到着を聞かされたので、国太郎の全身は殆ど僧に対する一つの探求心になって、客たちを成るだけ早く部屋々々へ引き取らせ、自分は馴染の太夫の部屋に起きていて終夜、魯八を問者かんじやに使つて雲水僧の消息を日々探り取らせた。

魯八の諜報に依ると、雲水僧は登楼して以来、普通の遊客と少しも違わぬコースを取つた。それには僧は日々、相手方の女に問い訊しては、事を運ぶのであつた。あまりに僧が子供のように色里の客になる態度を、人に正直に聞くので、それが可笑おかしいとて忽ち楼中の評判になつた。しかし、僧の相手になつた女は、また余りにその僧の初心うぶな態度に、どうやら其の僧が好きになつた様子で何くれとなく親切にもてなしつつあつた。その僧は男振りも立派で寧ろ美男むしだつた。

夜のしらじら明けに国太郎は帰り支度をして二階の階段を降りて来た。河岸の商売を間に合せるには、どうしてもこの時刻に出かけねば間に合わなかつた。国太郎が階段を降り切ると、話し声が上に聞えて男女がもつれ合つて階段を降りて来た。見ると男はかの雲水僧なので国太郎は、はつとして階段の蔭に隠れて様子を見ていた。

雲水僧はすっかり女にうつつを抜かれた様子で、玄関で草鞋わらじを穿くまで浅間あさましいまでに未練気な素振りを見せて居る。これに対して女もきぬぎぬの訣わかれを惜しんでいる。僧はす

つかり草鞋を穿き終えた。そしてすつくと立上つて二三歩あるくとくるりと振向いた。その時、僧の顔は引緊つて、国太郎が昨日、日本堤で見た平調に返っている。

僧は言つた。

——さて、おなご衆さん、わしはゆうべ持つとる金をすつかり費い果した。今朝の朝飯代が無い。あんたの仏道の結縁けちえんにもなる事だから、この旅僧に一飯供養しなさい」

女は驚いた。

——まあ、随分ずうずうしいお客さんだわね」

しかし僧は顔色一つ変えなかつた。

——いや、今まではあんたのお客さんだったが、もうお客さんではない。ただの旅の雲水だ。もう二度と斯うこいうところへ修業には来んでもよいだろう。まあ、そういうわけだから志しがあらば供養しなさい。なければ次へ行くまで」

女はおかしがりながら、有り合せの飯を用意して来た。僧は上りかまち櫃に腰かけて、何の恥らう様子も無く、悪びれた態度もなく、大声をあげて食前の誦文を唱え、それから悠々と箸はしを執つた。その自然の態度を見入つて居た女は何を感じたか、ほろほろと涙をこぼし掌を合せ僧を伏拝むのだった。違つた店の気配に楼主その他も出て来て事情を聴き、何やか

や持出して来たが、僧は淡如として言った。

——一人の腹だ、そうは入らんよ」

五

国太郎が、この僧を自宅に屈くっしょう請しょうして教えを乞うたのは勿論である。
この僧は後に明治の高僧となった。

青空文庫情報

底本：「岡本かの子全集5」ちくま文庫、筑摩書房

1993（平成5）年8月24日第1刷発行

底本の親本：「老妓抄」中央公論社

1939（昭和14）年3月18日発行

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2010年2月6日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

とと屋禅譚

岡本かの子

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>